

コメ作りが生んだ《改善》主義

～日本人と日本の“らしさ”～

坂 下 富

はじめに

日本人は1から10を生み出すが・・・

「日本人は1から10を生み出すのは得意だが、0から1を生み出すのは得意ではない」と言ったのは、発明家で起業家としても成功した日本人。もし0から1を生み出しても日本ではあまり評価されず、外国で評価されて日本でようやく注目・評価されることが多い。

工業製品や食品の安全やサービスで日本の1から10型を得意分野としている。歴史的にも古代から中世へそして近世・現代へと日本の時代遷移もまた巧みであった。これらほども1から10を生み出す改良、《改善》型で上手くいったのではないか。

危機から“守”と“破”の攻防

危機の認識や問題意識が大きく質が高ければ高いほど、現状打破、変革・革命・維新の動きが起きる可能性が高まる。これは時代の遷移のみならず、組織・企業や個人でも起きることである。ところが現状打破、変革などの動きが起きはじめると、それを妨げる常識や保守的・事大主義的な“守”勢力が必然的に出現する。“守”勢力や既成の常識や概念を打破・凌駕する“破”の力が生まれたとき、時代も組織も人も大きく変わる可能性が生まれることになる。

“守”は、危機に際しそれを矮小化または危機そのものを押さえ込んだり、部分改良で乗り切る現状維持的・保守的動きを呼ぶことにする。“破”は危機感を背景に現状打破、変革・革命・維新の動きを呼ぶことにし、“破”が進行して事が実現した状態を《改善》とする。

日本人と日本がどのように危機に対応し、どのような“守”や“破”と《改善》をしているのか考察したい。

日本史上 5度の大《改善》

弥生以前は置くとしても、米作りを開始以来の日本は5度の大変革を遂げた。

古代（弥生～平安の豪族貴族社会）→中世（鎌倉・室町の封建社会）→近世（織豊・徳川の武士と市民の社会）→近代（明治～敗戦の立憲制・世界大戦）→現代（戦後の産業立国・経済大国）まで日本は、ヨーロッパ主要国とほぼ同じ歴史発展の道筋をたどった唯一のアジアの国である。しかし2000余年に及ぶ歴史の中で、政争で政敵を死に追いやる例はあっても、前の最高権力者（天皇・摂政・将軍など）の殺害や国の制度そのものを抜本的に改める革命的なことは一度としてない。前時代を基礎にしながらか革や改変などの《改

善》を行うのである。たとえば源頼朝の鎌倉幕府は、天皇・朝廷の権威に依拠しながら土地支配と権力篡奪をすすめ、朝廷や貴族（公家）そのものは残している。信長ですら朝廷・天皇は利用しつつ、室町幕府はつぶすが将軍・足利義昭は追放に止めている。

米作りが生んだ改善主義

日本の権力構造も、現代の社会状況も《改善》型なのは、日本が長年に水稻耕作を営んできたからではないか。アジアで水稻耕作を行う国や地域は多い。が、日本ほど米作りに関わる密度と依存度の高いところはない。

複雑な地形や気候などの下で水稻耕作を営むことは、農民個々では到底不可能であり、集落の人々の連携共同が欠かせない。1年に一度きりの米作りに農民はもとより領主・支配者も、田地や栽培方法と出来具合に最大の関心を持たざるを得なかった。長年にわたる米作りと米・菜食生活は、日本人の胴長（腸が長い）などの肉体のみならず、几帳面で集団で共同歩調を旨とする精神的基盤を形成し、政治・社会構造もまた米作りを基盤として成り立ってきた。

日本と日本人の《改善》型 DNA は、米作りに直接関わる割合が減少した現代でも多くの国民に継承されるだけでなく、日本の社会的重要な要素になっているのではないか。もちろん日本らしさを構成する要素は多種多様で、重層的ある。それらの中から、米作りに焦点を当て、日本らしさを追求し、今後は環日本海諸国との比較検討も出来ればと考える。

米作りと改善主義については、〔4〕で改めて記述したい。

〔1〕歴史的遷移も《改善》主義の日本

“守”と“破”の攻防から新時代へ

1 古代から中世へ ～平安時代と鎌倉政権の“破”策～

隋唐王朝の律令制や文物を基本理念とした奈良・平城京での政治は、貴族間の政争と仏教への過度の依存で揺らいだ。桓武天皇は平安京遷都で権力に近づこうとする“守”勢力の僧侶・貴族を抑え込み、征夷大將軍・勘解由使の設置など律令の改変という“破”策で《改善》し新時代を開いた。また藤原氏による摂関政治のもと貴族社会の政治的バックボーンで、精神的教養的基盤であった唐との交流を遣唐使の廃止という“破”策で断ち切った。このことで多くの日記文学や『源氏物語』『古今集』など日本の言葉、文字の発展があった。300年に及ぶ日本史上最長の平和な時代をもたらした。

一方、公地公民の唐式理念は100年も経たない743年の班田收受法で崩壊しはじめ、摂関政治体制自体が自らの利権のため公地制度の“破”策を進め荘園が成立した。

その荘園の名主や荘官階層が武士化して地域や都の治安を担い、武士集団のリーダーとして平氏と源氏が中央政界に進出。武力を背景にした平清盛は摂関政治を模倣し、宋との貿易拡大以外の何らの“破”策を打ち出せぬまま、一族は公家化して滅亡の道をたどった。

源頼朝の開いた鎌倉幕府は東国武士団の期待を背景に、天皇・朝廷の権威に依拠しながら土地支配と権力篡奪をすすめ、朝廷や公家そのものは残している。権力回復を狙う保守

勢力公家の“守”に対し、鎌倉政権は平安京ではなく遠く鎌倉に幕府を置き、武家による政治を実施した。幕府による領地の保証、加えて守護地頭に地域の治安と政治を大幅に任せる“破”策（封建制）を朝廷から獲得し、朝廷・公家による中央集権から武家による地方分権という新時代を開く《改善》に成功するのである。

2 中世から近世へ ～秀吉は家康の反面教師～

後醍醐天皇の政権奪還行動に乗じて覇権を握った足利尊氏は、京都に幕府を置き、しかも自らの武力を持たず公家化し、将軍の地位はきわめて不安定であった。応仁の乱をきっかけに群雄割拠し、中央に登ろうとする戦国大名もいたが、それは足利将軍の下での権力を志向するものであった。

織田信長は革新的な戦闘態勢を整備し「天下布武」を掲げ、足利将軍、各地の大名、仏教寺院など既存の権力との対決。職業軍事集団の設立、楽市楽座などの経済自由の“破”策を中心に旧弊の“破”に努め、軍事的政治的成功を取めた。信長の「天下布武」は鉄板で覆い大砲を装備した大型船で本願寺を支援する毛利水軍を撃破し、馬防柵と鉄砲の連射で、当時最強といわれた武田騎馬軍を撃破した。これらは危機に際しその打開策を考え抜いた信長の《改善》の最たるもので、多くの《改善》を積み上げたのが信長の軍事と政治である。

既存の勢力は足利義昭を中心に信長の“破”策に対抗し、ことごとく“守”策を取り保身に回らざるを得なかった。天皇は利用しつつ、室町幕府はつぶしても最後の将軍足利義昭は追放に止めた。その信長が本能寺で家臣・明智光秀に倒されたのは、圧倒的力を持つ信長を殺さなければ殺される極限状態も原因だが、前将軍や公家らの“守”勢力が光秀の背後にいたことも一因である。鎌倉幕府最後の執権北条高時も、天皇側への権力奪回を目指す天皇側によって死（自殺）に追いやられている。

和辻哲郎は『風土』の「日本人の三大特徴」で「勇氣は貴く美しく、怯えは卑しくきたない。しかし単なる強剛は醜く、残虐は極度に醜い。なぜならそこには勇氣のみならず執拗な利己的な欲望が存在するからである」と書いている。時代の転換を起こす“破”活動で、先の権力者を殺害することが皆無なのは、残虐と利己主義を嫌う日本人の特徴から来ることに注目したい。

豊臣秀吉は身分統制、検地と石高制という近世の骨格とも言うべき《改善》を強力にすすめた。徳川家康と江戸幕府は、身分制度・石高制などは継承しながらも、多くの面で信長・秀吉のやり方を否定する以下の“破”策を中心に安定を志向する《改善》を実践した。

①法治主義（武家諸法度など）の採用②武断主義を否定し文治主義化（髭の禁止や儒学の奨励など）③鎖国の実施（海外派兵の否定、キリスト教の禁圧、貿易の抑制など）④中央集権の否定（幕藩体制など）⑤権力の分散（譜代への権力と交替制）⑥家康の血統重視（御三家・御三卿）⑥朝廷や寺社の統制と抑制

これらの《改善》策は安定と平和な時代をもたらしたが、幕政は「権現様以来」とい

う全てを江戸初期の状態に固定しようとする“守”政策に陥った。固定した身分と社会秩序、商業経済の抑圧、気候変動の影響などで江戸時代後期にはコメの生産の停滞や下級武士層・下層農民らの生活困窮が表面化し、社会は不安定化した。ここへペリー来航を契機に、幕藩体制の根幹の鎖国が解かれて、経済的政治的行き詰まりが深刻化した。

幕藩体制を守ろうとする“守”勢力に対し、尊皇攘夷論で幕府を否定する“破”策を打ち立てた薩長勢力が倒幕に成功すると、武士階級そのものをかなぐり捨てるという一種の革命的《改善》を实践した。

3 明治維新の“破”と“守”

欧米の近代国家を手本とした藩閥政権は、維新の名の下で過去の仕組みの全てを破壊するとも言える以下の抜本的な“破”と《改善》をすすめた。

①中央集権体制の確立②富国強兵（殖産興業、徴兵制、教育の普及など）③土地と税制の改変（地租改正で現金納、土地売買の自由化）④文明開化（開国和親、西洋文物・制度の積極的採用）⑤封建制の解体（秩禄処分・四民平等政策）

アジア最初の憲法制定、不平等条約の一部改正などで近代国家の緒に就いた日本は、日清・日露戦争に勝利し、さらには第一次世界大戦を経て欧米列強の列に加わった。

欧米列強に大きく遅れ、植民地化の危機もあった明治政府は、針ネズミに似た全身の神経を立てて欧米に追いつくことを目指した。日本の全ての維新を企図し、前代まで考えたこともないほどの革新的《改善》を遂げた。

しかし「王政復古」を掲げ、天皇が権力の中樞に復権したことは、当時の政治的、国際的状况からはやむを得ないとも言えるが、まさしく復古であり全般の改善にはそぐわない“守”の1点であった。また日清戦争以来の不敗、成功体験で軍は装備・戦略戦術全般の近代化を軽視し、天皇を政治的軍事的に利用しながら政治権力を志向した。軍の権能拡張と天皇の絶対化は、近代国家での《改善》とは言えず、日本の政治的経済的状况が悪化したとき“守”への大きな作用をした。すなわち満州への侵略を手始めとした軍主導の体制は、ついには第二次世界大戦の敗戦で止んだ。朝鮮・中国への侵略策は、かつての欧米型植民地策を模倣した“守”策であった。

4 敗戦からの大《改善》～日本一新～

無条件降伏ながら、それ以前の体制を守ろうとする“守”勢力が陰に陽に抵抗する中、占領軍・マッカーサーは旧体制のことごとくの改変＝“破”を突きつけた。天皇制と統治機構を残すことは認めたが、軍の解体と民主化を基本にして政治改革（日本国憲法制定、治安維持法廃止など）、経済改革（農地解放、財閥解体、労働組合の育成など）、教育の改革（教育基本法、教育委員会制度）など広範な《改善》をすすめ、政治文化や人々の価値観まで日本は一新された。

講和条約と日米安保条約を結び独立した日本は国際社会に復帰したが、冷戦下で保守と

革新の対立が続いた。この間、戦争放棄の下で経済的産業的情熱に日本人の関心と情熱が集中し、以前は軍に向かった人材と資源の多くが基幹産業（鉄鋼・石炭・繊維など）に向かう世界的に希な“破”の渦が巻き起こった。日本は廢墟から立ち直り、奇跡の復興と高度経済成長を果たし、政治も安定しはじめた。日本は世界有数の経済大国、民主主義国家へと変貌する《改善》を成し遂げた。

高度経済成長、技術開発、製品改良を中心に世界的“破”をなした日本は現在、経済の低成長、少子高齢化、近隣国関係などの不安定化などに対し、政治が大きな課題ほど決められない漂流に陥っている。原因は既得権益を持つ“守”勢力を超えられないためである。戦後70年を経過する今日、次の“破”を期待するのは時期尚早か。

5 天皇の“守”“破”と《改善》

日本の歴史は天皇を抜きには語れない。“守”をなした天皇は数え切れないが、“破”や《改善》に深く関わった天皇は少ない。それは、天皇が日本国憲法下での象徴的存在が基本形態であり、神として最高位の自らが“破”や《改善》行動を行うことは、意味をなさず危険なことでもあった。

神話上の神武東征は、日向から近畿への移動を成したことで、後の天皇家と日本国家の形態を作った点ではそれなりの“破”であったと言えよう。が即位？後の事績は何もない。

壬申の乱で覇権を握った天武天皇は、各種の施策を命じた。その中で、歴史の編纂と天照大神・伊勢神宮を頂点とする体系を築くことで、それまでには確立していなかった天皇を絶対化するという《改善》に成功した。（伊勢神宮は別項目で詳述）。

桓武天皇は先に書いたように、律令からの脱却策で《改善》に取り組んだ。

ポツダム宣言の受け入れに逡巡し決断できない鈴木首相と軍部大臣に対し、昭和天皇は「無条件降伏」を決断しそれを実行させた。「一億総玉砕」が叫ばれる終末的戦局下で、天皇の決断は“破”であり、次の時代を開き、絶対天皇から象徴天皇への道を開く《改善》でもあった。

“守”や現状維持＝前例主義を尊重した天皇は多いが、封建制に強く抵抗した3人の天皇・上皇に注目したい。後白河上皇は平家、木曾義仲、源義経を操ることで源頼朝の武家政権、地方分権の実現の食い止めに図り、後鳥羽上皇は源実朝の暗殺を契機に倒幕を図ったが破れ、流罪となり（承久の乱）、後醍醐天皇も鎌倉幕府の打倒を図りいったん成功するが、結局足利氏の室町幕府成立で企図は果たせず、武家の世への流れを止めることは3度とも失敗に帰した。

〔2〕古代から連続する《改善》

1 土地支配6度の《改善》

土地は狩猟採取の縄文時代には縄張りであったが、弥生時代以降の日本では水稻耕作が中心となって、土地はきわめて重要な生命にも代えられないほどの意味を持ち、土地は有

力者に集中していった。

豪族が土地を私有し民を支配する私地私民制度は、645年の大化改新の詔以降、唐王朝に習った公地公民制・班田収受法で中央政府が口分田を人民に与え、租庸調や兵役を課す中央集権制に変更された。この制度は大宝律令(701年)で本格的に施行されたと考えられる。

743年に墾田永年私財法が発令され、新しく開墾された田地に限って私有を認め、公地制の大原則を崩すという“破”策を取った。口分田の不足も原因だが、社会的・政治的不安が強まる中で、官僚制が未成熟で律令制の運用も唐のようには行かず、私地への豪族・寺院らの欲求を飲まざるを得ない時代でもあった。摂関政治下で、私有地は寄進され貴族・社寺などの荘園として全国を覆い、政治的経済的社会的基礎ともなった。

戦国大名は荘園を篡奪し、豊臣秀吉による石高制・太閤検地で複雑な支配関係にあった荘園を一掃する“破”策を取り、支配者(領主)が直接農民の耕作権を認めて徴税する《改善》を成し遂げた。この仕組みは幕藩体制の政治的経済的社会的基礎となった。

明治政府は地租改正で現金納とし、土地売買の自由化も行って前代の土地支配の仕組み抜本的に“破”し、税制を近代化する《改善》を図った。この後地主による土地支配が進み、地主と小作の関係は日本の非民主性の1つとなった。

敗戦により地主の解体＝農地改革で多くの自作農が生まれ、農村の民主化を進めるという《改善》が著しかった。

日本の土地支配関係は、①有力豪族や天皇家による支配→②公地公民制で土地の中央集権支配→③私有地化で荘園制発達→④太閤検地で荘園制に代わり武士による直接支配確立→⑤地租改正で地主制が発達→⑥農地改革で自作農創設と、土地の実質支配者が時代に合わせ6度にわたり《改善》された。

2 伊勢神宮式年遷宮は20年ごとの“破”

2013年日本列島は伊勢神宮の式年遷宮で沸いた。誘導されながら新・神殿に参り、一通り眺めて去る人がほとんどで、隣に壊されずに残っている旧神殿に目をくれる人は希だった。茅葺き屋根は新・神殿とは違い半ば朽ち、掘っ立て柱の根元は一部痛み全体的に古色にくすんでいる。

20年ごとの遷宮は西暦690年から始めて今回が62回目とされる。数多くの建物をはじめ種々の調度品まですべてを造り替える式年遷宮は、発意した天武朝の懐古的“守”思想かと思われた。一方では仏教を崇敬して礎石や巨大な伽藍を持つ薬師寺創建をすすめていた天武天皇がなぜ古来の掘っ立て式での式年遷宮を指示したのか。

『日本書紀』天武天皇10年(681)に「畿内及び諸国に命じて詔して天社地社の神の宮を修理らしむ」とある。武光誠は『神道』(朝日新書)で、「当時は新しい建物を建てることを修理と表記した」「神社は寺院と区別するために日本の伝統的な工法(中略)太い柱、茅葺き屋根を持ち、神聖な稲倉の姿を模した神社独特の建物が出現した」と記している。これまでは山や岩、大木を依り代にしてきたものが寺院に対抗して、神を祭る神社が出来

たのである。

出雲大社は期間を限る式年ではないが伊勢神宮と同じ 2013 年に 60 年ぶりの建て替え・遷宮を行った。伊勢神宮以外にも遷宮を行う神社はある。

身近な神社を見ても、出雲大社を見ても、原初的な掘っ立て方式や茅葺き屋根は見られず、礎石の上に建てられ、茅葺きや檜皮葺きの屋根は希で、ほとんどが瓦や銅板葺きである。これは、管理上のことと費用をかけないという経済上の理由もあり、各時代の技術を取り入れている。原初的な掘っ立て方式や茅葺き屋根で伊勢神宮が 20 年ごとのしかも数多くの社殿を建て替えるのは、同時代には法隆寺など最新式の伽藍は多く存在しその技術も確立していたので奇異に思える。20 年を経ると屋根の茅や柱の根元は朽ち始める。同じ建物や宝器・調度品類を式年ごとに作り改めるのは、伊勢神宮は別格であるという思いもあったろうが、いつも同じ状態で一種のタイムカプセル（しかも永遠に朽ち果てない）を求めたとすれば、発案者の天武天皇は、当時も現代でも一般の常識を超える“破”策で大きな《改善》を果たしたといえる。

3 仏教《改善》で日本人は総信者に

仏教は、広くアジア各地に広まった。東アジアに伝わった北伝（大乘）仏教中で、日本は最も高い 34.8%の信者率（無宗教 51.3%）で、中国は仏教 2.1%（無宗教 96.0%）、韓国は仏教 20.7%（キリスト教が 39.3%で 1 位）。（電通総研外編「世界 60 カ国価値観データブック」2000 年調査）

日本にもたらされた仏教は、初期においては異国の神や鎮護国家の力、学問仏教であり、平安前期には密教全盛となりいずれも天皇や皇室、貴族の崇敬で繁栄した。僧侶の世俗化と墮落が起き、寺院が権力を持ち権威化して自らの権益を守ろうとして、貴族や武家とも争い、他の宗派を抑圧する逆行的な“守”勢力と化した。やがて末法思想や浄土思想が広がり、それらは貴族から一般大衆にまで広く支持され始め、鎌倉期には浄土真宗や日蓮宗などが農民や都市民の間に、禅宗が武家を中心に普及していった。

平安末期から鎌倉期の新仏教はそれまでの仏教とは違い、難しい修行・難行をしなくても救われるという教え（易行化）として大きな《改善》を果たした。また戦国期を中心に武家勢力（大名・領主）と対決する一向一揆などが団結の精神的支柱となったこと、さらに江戸幕府がキリスト教禁止のための檀家制度も加わり、ほとんどが仏教徒とされた。

日本人は基本的に多神教で、それに仏教信仰が加わり、世界の多くの人々のように一神教でないことは、多様なものを受け入れたりする柔軟な思想や穏やかな性質を醸成してきたと考えられる。長年の水稲耕作に伴う工夫や努力、勤勉性・協力性に加え、この柔軟な思想や穏やかな性質が、「0 から 1 を生むのは不得意で、1 から 10 を生むのが得意」の背景にあるのではと考える。

日本より早く仏教が伝えられた中国・朝鮮（韓国・北朝鮮）では、なぜ仏教が定着しなかったのか、日本との比較検討を今後の大きな課題としたい。

4 封建制と家紋

多種多様なデザインの日本の家紋は、封建制と密接に関わって発展した。家紋には植物に由来するものが圧倒的に多い。ヨーロッパの騎士などの紋章やエンブレムは獅子や鷲などなどの勇壮なものが主流だが、日本では菊、桔梗などの植物をデザインしたものが主流で、動物のデザインは雀や蝶などがあり、勇壮さをあからさまに示す例は見られない。古代中国では、軍の有力者が旗印として自分の名前の1字の「飛」などを掲げ、日本のような模様・デザインを用いたのは確認できていない（今後の研究課題）。

家紋は平安貴族が牛車に付けて自分のものを見つけやすくしたのが由来とされる。その頃、藤原氏が三つ巴紋、平家が蝶の紋などをつける例もあった。合戦に際しては平氏が赤旗、源氏が白旗を掲げた。平家が滅亡して以後、源氏の白旗のみが残り、しかも戦闘への動員人数が増えたため、源頼朝は白旗に竜胆（りんどう）紋をつけた。1189年の奥州征討で、家紋のない白旗を掲げて参陣した御家人を、頼朝が咎めたと『吾妻鏡』は記している。

元寇を描いた『蒙古襲来絵詞』では、竹崎季長や菊地武房ら日本の武将はそれぞれの家紋を旗印としているが、元軍は日本のような一騎打ち戦法ではなく、集団は同じ旗を掲げ集団で攻撃する。元軍は集団戦法を取るためと理解できるし、個人を目立たせる必要もなかったからと考えられる。

公家階級が他との識別や自己の一族を誇る家紋だったが、使用は限定的であった。武家は合戦で自らの存在と巧名を示し、恩賞を得るためそれぞれの家紋を持ちそれを戦陣に掲げた。家紋はどの武士にも不可欠ものとなり、多種多様化し、一族を束ねるシンボル、家の誇りとなった。家紋は封建制の進展と表裏一体を成し、武家の世を切り開く“破”策であり、封建制確立への《改善》力となった。

江戸幕府は、身分統制を強化して士農工商の徹底を図り、武士には苗字帯刀の特権を与えた。しかし庶民にも家紋の使用は認めたことは、苗字（名字）を名乗れなくなった庶民にとって苗字の代わりとなった。また歌舞伎役者などが屋号として用いたことで、家紋は社会に根を下ろしたが、誰でも持つことで一種のインフレがおこり、しかも長く平和が続いて合戦の機会もなく家紋は、他の大名などの識別と家柄の誇示が主な手段となった。このことは封建制とともに歩んできた家紋が、独特の意義を失い封建制の消滅（明治維新）と軌を一にして形式化し、冠婚葬祭の飾りの1つとなった。

アメリカ大統領の記者会見はその記事である双頭の鷲が付いた演台で、日本の首相は皇室の家紋の流れを持つ五七の桐の付いた演台で記者会見をする。中世の武士も現代の日本も優しいデザインの紋章を好む。

5 言葉と文学の《改善》

日本人は、多くの文物を他国から学び自己のものとした。なかでも漢字を習得し、それを自己のものとした《改善》は特筆される。

記録手段を持たず語り部などが記憶し伝承する時代、渡来人が記録する漢字はまばゆい不思議な存在だったろう。漢語を理解し漢字を操るのはごく一部の人に限られ、しかも日本語を漢語に置き換えて記録する困難さと日本の言葉で記録できないもどかしさがある。やがてその文字の特徴を見抜いたところで革命的“破”がおきた。奈良時代に漢字の音「万葉仮名」を使って日本語を書き記す《改善》を行った。

万葉仮名から、カタカナと平かなが生み出されるという第二の《改善》まではあまり年月を要しなかった。平かなは日本語（和語）をもっとも表記しやすい文字であるが、女文字（おんなで）として、漢字を読めない、読んではいけない、使ってはいけない女子の文字として低く見られた。漢文を使いこなし和漢文で日記を書く貴族は、仮名文字への“守”の力で“おんなで”という蔑み（さげすみ）をした。が、その中から、紀貫之の『土佐日記』などの日記文学、『枕草子』『源氏物語』などが生まれた。ここで初めて日本語（和語）が話し言葉とし自在に記録されたことは特質すべき《改善》であった。

しかし漢字交じりの平かな文は、公的分野、男の世界では長く主流とはならなかった。公式文ほど漢文や和式漢文で書かれ、話し言葉と乖離して書かれるという“守”が続いた。「話し言葉が変化しても（中略）書き言葉というのは、目に見える形で残るので、伝統を保持していくことが容易」と、山口仲美氏は『日本語の歴史』で書いている。

「広く会議ヲ興シ・・・」で始まる五箇条の誓文は明治元年（1868）発表された。明治維新は、過去の仕組みの全てを“破”するほどの《改善》をすすめたが、公式文を漢字カタカナ交じり文に切り替え、多くの一般人にも読めるという《改善》を図った。日本に文字が入って以来最も権威ある漢文や漢式和文を公式文から追放するという大《改善》を実行した。その一方、西欧文明の受け入れに当たり、多くの言葉の翻訳に「哲学」「価値」「警察」などの漢語を創作し当てるといふ《改善》も行なわれた。明治期を通して、書き言葉を話し言葉に近づける言文一致という《改善》も福沢諭吉、尾崎紅葉以下多くの人士により実践され、現代の我々はその恩恵を享受している。

漢字・漢文を使い始めて以降、和語に加えて漢語も使い例えば「紙」は「かみ」「し」と覚えることになる。さらに英語など外来語や和製英語などもあり、日本人は多くの言葉を持つことになった。英語では「I・my・me」が基本なのに、日本語はIだけでも「わたし」「私くし」「おれ」「自分」その他・・・。加えて謙譲語、尊敬語など他の言語ではない複雑極まりない日本語となった。

応用や類推、洒落、皮肉も得意な日本人は、言葉を操り楽しみ自分のものとしていく。「女房」は本来天皇に仕える高級女官の呼称であったが、江戸時代には「うちのカカー（妻）」を女房と呼ぶこともあった。今では女房と呼ばれていやな顔をする「カミサン」「オクサン」も多い。「トウリョウ」「オヤカタ」は棟領・お館で本来はきわめて上級な武家の呼称であったものを、大工の棟梁・親方、一般の大工にも使っている。マンションは英国では元来女中部屋がある集合住宅であるが、日本では文化住宅、アパートのやや上のイメージで、バストイレ・キッチンが整った「ワンルームマンション」までもマンションと呼ぶ。カラ

ヤ（川屋）、ご不浄、WC はもはや死語となり、便所・トイレは会話では使われるが、場所の表示は男女別のサイン表示が圧倒的である。便所・トイレも死語になり、新しい言葉に置き換わっていくのか。

新語・流行語大賞が毎年暮れの大きなニュースになるのも日本の風物詩となっている。細やかで繊細な日本語は、時代とともに成長と変化をするのは、日本人が得意とする《改善》の性ではないか。

6 庶民（一般大衆）の《改善》

日本では、本来権力とは無縁の庶民（一般大衆）が権力を倒し、または権力を樹立した例は一部小規模な地域の例のみである。環日本海諸国との対比を今後行いたい。

武家・庶民の直接行動で《改善》

承平・天慶の乱（935~941年）は、地方支配を強める国司への不満が大きな要素であった。乱の結果中央政界などから武士の実力が認められる“破”が起こった。朝廷は「侍」として滝口の武士、地方では押領使・追補使、国衙の兵として用いた。このことが平氏、源氏が中央で次第に重きを成し、次の時代＝中世封建制への《改善》の導火線となった。

「8世紀後半から、籍帳から逃れようとする浮浪・逃亡が増え（中略）戸口数は保たれても女性ばかりになるような、偽籍が増えてきた」と、『山川出版社・新日本史』にあるように、律令制の下、戸籍計帳で多大な負担を課された庶民（一般大衆）が、直接行動で支配者に対抗し、状況の打開、《改善》を求めた。逃散・偽籍など庶民（一般大衆）の直接行動を示す史上初の例で、その後も、農民たちは集団で逃散する例はある。

集団の直接行動で《改善》を求めたのが、室町時代の正長の土一揆・山城の国一揆などであり、徳政令の発布や年貢の減免などを獲得したこともある。山城の国一揆は、地侍や農民らが守護を排除して8年間自治を行い、加賀の一向一揆は守護・富樫氏を倒し100年間にも及んで僧侶や信者・国侍・農民らが自治を行った。これらは、守護らの支配層が互いの争いに走って領民の妨げとなったため、庶民の団結で排除し、政治を自らの手に持ち年貢を自ら決める“百姓の持ちたる国”を実現した。これらの一揆の背景には新田開発などで力を付け、惣村と呼ぶ自治組織、その中核としての神社の祭祀組織の宮座などによる団結力があつた。江戸時代には度重なる凶作・飢饉があり、百姓一揆が多発し、米価高騰により都市の下層住民を中心に激しい打ちこわしもおこった。「一揆・打ちこわしの頻発は、幕藩体制そのものを揺るがした」と、『山川出版社・新日本史』にあるように、庶民の直接行動は“破”であり次の時代＝明治維新への導火線となった。

明治維新初期にも「学制反対一揆」など一揆が多発し、地租改正に反対し、地租の減免を獲得した一揆もある。富山県の漁村に端を発した米騒動が全国に拡大し、寺内内閣は辞任。衆議院第一党の政友会の原敬内閣が日本初の本格的政党内閣を組織した。

〔3〕現代の改善

戦後 70 年を経過した現代の《改善》状況を考えてみたい。

占領下の憲法改正などの諸改革を除き、政治・社会分野で見るべき《改善》は見られない。強いてあげれば長年続いた自民党中心の 55 年体制の崩壊がある。リクルート事件などの金権腐敗批判を乗り越える“破”として小選挙区制や政治資金規正法改正などを行い、非自民政権が誕生した。が、見るべき政治的《改善》は見られないままである。他方、高度経済成長、その後のグローバルな企業間競争などで産業経済分野での“破”と《改善》にはめざましいものがある。

シンカンセンは「0 から 1」？

繊維などの糸偏産業に始まり、鉄鋼・造船などの重厚長大産業、石油化学・電機産業などのめざましい進展を中心に日本の貿易収支は、大幅な黒字となった。

産業経済での《改善》は枚挙にいとまがないが、新幹線は戦後日本の《改善》のシンボルである。東海道新幹線は 1964 年 10 月東京新大阪間に開業。「シンカンセン」は世界的に高速鉄道の呼称となった。以来 50 年間、他の路線も順次運転を始め、運転スピードなど各種《改善》を積み重ねて時速 320 km の路線もある。何よりも多くの乗客を高密度で運びながら乗客の死者はないことが注目される。

新幹線は世界初の高速鉄道と考えれば、「0 から 1 を生んだ」日本の不得意を覆した例になる。しかし新幹線も「1 から 10」の例を超えない。満州鉄道での高速（時速 160 km）運転実績を持つ国鉄が国内で、戦前に構想して一部路線予定地は買収を開始していた。満鉄はヨーロッパでの高速鉄道と同じ広軌でスピードもヨーロッパに伍していた。すでにある技術を基礎に置いて、画期的な新幹線は生まれたのであり、日本人の得意とする「1 から 10」の典型的《改善》の例である。

反ガラパゴスのウオークマン

第一次世界大戦から日本は農業国から工業国へ飛躍した。しかし日本製品は「安くて粗悪」のレッテルを世界に喧伝してしまった。戦後の日本の輸出品は販路拡張に悪戦苦闘しながらも、造船や電機製品を中心に「安い品物がいい」と評価を高め輸出立国となった。

設計から製造まできめ細かく、細部まで気を配る日本品は国の内外で評価を高めたが、気を配りすぎて余分な、しかも日本人好み、日本人向けの製品が外国ではそのまま通用しなくなるガラパゴス化が起こり始めた。それを“破”した《改善》の好例がウオークマンと写ルンだ、である。

SONY のウオークマンは、録音機能のないカセットテープレコーダー。「録音機能のないものは売れない」と商品化ができないでいた。それを開発研究者の所で偶然見つけた盛田昭夫社長が「これは 50 万台売れる」と商品化を指示、結果は爆発的に世界中で売れた。

フジフィルムは、機能が増え高価格となりつつあったカメラも製造していた。使い捨てカメラとして 1980 年代売り出されると一躍人気商品となり、カメラ人口を一気に増加させ

た。カメラの機能をレンズとフィルムだけ残し、あとは捨て去る《改善》は的中した。

シャープは携帯電話にカメラ機能を付加する《改善》で世界の基準を作り上げた。

顧客をつかむ《改善》

アサヒビールは、戦前からホテル・旅館など業務用を中心にビール業界のトップだった。しかし家庭用冷蔵庫の普及を背景とするキリンビールにトップを奪われ、キリンは 50%超のシェアを占めた。

苦境のアサヒは新製品の売り出しを企画し、開発担当者は数種類の候補を示した。住友銀行から来た社長・樋口広太郎は、日本の南から北へ試飲のキャラバンを実施して人々が求めるビールをアンケートした。結果は開発部門が「これは売れない」という候補がトップとなり「スーパードライ」として発売。同時に戦前からの日の出マークも切り替え、キリンを逆転し再びトップの座を占めた。専門家の意見よりも、ビール素人の社長が顧客の意見を全国キャラバンで集めるという《改善》策で社を蘇えさせた。

この後ビール業界は第二、第三のビールなどで消費者の心と財布を掴む《改善》に成功し、バイオや食品分野などへ進出も図っている。

日本酒の販売量が年々落ち込み、多くの酒蔵が規模縮小や廃業を余儀なくされている。そんな中で、地方の小規模な酒蔵が廃業の危機を瀕しながら、徹底した高級酒を造り世界的に注目され、生産が追いつかないようになった。醸造と発酵の特技を生かし、化粧品や発酵食品などで成功を収めている酒蔵もある。自社の特徴をしっかりと掴み、それから出発していく、すなわち「1 から 10」の《改善》の例である。

イトーヨーカ堂は、アメリカで見つけたコンビニ（セブンイレブン）の日本でのライセンスとマニュアルを多額のお金を投じて獲得し、1974 年第一号店を東京に開業した。アメリカ生まれのコンビニを日本式《改善》で見事に花開かせ、2007 年には小売業店舗数では世界最大に、2013 年には 5 万店を超えた。この間、2005 年には本家アメリカの 7-ELEVEN を逆に子会社化している。これもまた「1 から 10」の例。

スーパーのダイエーは、主婦の店、安売りの店で成功を収め、小売業で日本一の売り上げ、プロ野球球団も支配下に置いた。消費者の志向が向上する動きに付いていけず（気がつかず?）、売り上げが低迷しイオンの子会社となり、この後社名も無くなることになった。ダイエーもアメリカのスーパーマーケットにヒントを得て、日本の小売り形態を破壊する“破”を示した。が、その後の《改善》を忘れ消えてゆく例である。ダイエーの子会社となっていたのがリクルートである。

リクルートは東大生の江副氏が創業し、企業として大成功を収めたが、政治家との未公開株事件（リクルート事件）で会社は低迷し、ダイエーの子会社となった。その後リクルートは、就職情報に限らず世の中の変化を掴み、結婚・旅行・不動産など広範囲の分野の情報を集め流す《改善》で成功した。東証 1 部に上場して史上 2 位の約 2 兆円の時価総額を手にした（2014 年）。

《カイゼン》のトヨタ

トヨタ自動車は、作り過ぎ・運搬・動作など7つのムダ削減、ジャストイン・かんばん・改善・標準作業時間などで絶えず《改善》を図り、今は世界第一の生産台数を誇る。

動力織機製造会社がトラック製造事業から本格的乗用車生産への夢を持ったが、「輸入でいい、国産メーカーは不要」の政府方針に翻弄された。戦後、乗用車生産の再開にこぎ着けたが、本家アメリカには生産能力、車の性能などは遠く及ばなかった。アメリカ式ライン生産方式の問題点を先の7つのムダ削除、《改善》の連続によってコツコツと着実に積み上げて、世界に例を見ない、倉庫（部品在庫）を持たず、無借金経営などの“破”策を実践した。

これらに加え、電気自動車や燃料電池車のつなぎと言われたハイブリッド車で成功し、2014年12月には世界的な燃料電池車（FCV）開発競争の先陣を切り、世界初の市販をする。トヨタの先を見る目、《改善》力が日本を牽引するリーダーとなっている。

2015年度に燃料電池車の市販開始のホンダとの切磋琢磨状況を、読売新聞は「抜きつ抜かれつの開発競争。それこそが日本のFCV技術を世界トップに引き上げ、新たな市場を切り開く原動力だ」と書いている（2014年11月23日）。

世界へ進出する日本の《改善》

世界各地に進出している日本の工場や商社は多い。最近では回転寿司・理髪・宅配などが日本式サービスを武器にしてアジア各地に進出をして高い評価を受けている。

日本式サービスの特徴の主なものを列挙する（2014年11月9日NHK番組「新・日本の稼ぐ力」から）。

- ・時間の正確さ
- ・客の満足をとことん追求する
- ・品質を確保し価格を下げる
- ・長い目で現地の人材を育成する
- ・ローカルに寄り添い、現地の人から学び、アレンジ力がある

どれをとっても大切な要素だが、「アレンジ力」すなわち、現地に合わせた《改善》力に注目したい。日本人の勤勉さ・まじめさ、几帳面さを現地に持ち込み、さらに日本での成功やビジネスモデルに拘泥せず、現地に合わせた《改善》を行うことで成功している。海外でのこのような事例は、古くは南米へ移民した日本人が、様々な苦難の中で栽培の改善、新分野への進出などで成功したことを思いおこさせる。

《改善》には次なる《改善》が・・

《改善》は、現代の企業間では当たり前である。それを忘れ、怠った企業や集団は敗れ、舞台から退場することになる。

《改善》の出発点には、危機感・問題意識を持つ人や集団が不可欠である。その自覚や認識が大きく深いほど、しかもその自覚者（認識者）が良きリーダーであるほど現状を“破”し、《改善》は成功に近づく。しかし《改善》は一旦成功しても、時間の経過とともに《改善》の意義が失われて、守ろうとする“守”の作用が働き、次の《改善》を妨げることが起こる。この“守”と“破”＝《改善》策との差が多いほど、激しい軋轢・対立となる。

《改善》には次なる“破”を恒常的に、しかも現実や将来見込みの状況に適合した《改

善》策が必要となる。

〔4〕 コメ作りで日本は改善主義へ

繊細な感受性

日本の風土は四季折々の変化に恵まれ、人々の生活は、循環する自然と調和しつづくりかえされてきた。夏の高温多湿や暴風雨などの自然の威力が植物を繁茂させた。人々は、自然の恩恵を享受し、脅威には忍従し、自然順応的なアニミズムの文化を形成した。そうして、山川草木を愛し、おのずから移ろいゆく自然のあり方にみずからを委ね柔らかなやさしさに包まれたいと願う、繊細な感受性が育まれた。稲作の弥生文化とともに、豊作を祈り災害を恐れ八百万の神を祭る多神教の文化が形成された。春の農事はじめと収穫を感謝する秋の収穫祭を中心とした、カミマツリの日がハレの日となった。

大王（天皇）を中心とする大和政権が成立すると、新嘗祭などの農耕行事が王権の祭祀に組み込まれ、祭祀を主宰して神々や祖霊と交感することが、大王の役割となった。

以上は『高校現代社会 実教出版』の一部で、日本の自然環境と日本人の感受性、稲作とカミマツリ、天皇制との深い結びつきを示している。

モンスーンの受容性と忍従性

和辻哲郎は『風土』でモンスーン・砂漠・牧場の三類型を示し、日本の特徴を以下のように書いている。「 」は引用部分

日本をインドと同じモンスーン的で、受容的・忍従的であるとしながらも、「日本はモンスーン域中もっとも特殊な風土を持つ。それは熱帯的寒帯的の二重性格と呼ぶことができる。」「二重性格は植物において明確に現れる。強い日光と豊富な湿気を条件とする熱帯的な草木が、ここでは旺盛に繁茂する。（中略）その代表的なものは稲である。しかしそれと同時に他方には寒気と少量の湿気とを条件とする寒帯的草木（中略）が旺盛に繁茂する。麦がその代表である。」

和辻は同書で、日本の受容性と忍従性は（熱帯的のみのインドとはちがう）熱帯的と寒帯的の二重性格があると、以下のように書いている。

「単に熱帯的な、したがって非戦闘的なあきらめでもなければ、また単に寒帯的な辛抱強さでもなくして、（中略）変化を通じて気短に辛抱する忍従である。」「だから日本の人間は自然を征服しようともせずまた自然に敵対しようともしなかったにもかかわらず、（中略）持久的あきらめに達したのである。」

「忍従性もまた季節的・突発的である。」「忍従に含まれた反抗はしばしば台風のなる猛烈さをもって突発的に燃え上がるが、しかしこの感情の嵐の後には突如として静寂なあきらめが現れる。」

忍従性・受容性の日本人の美徳を以下のように書いている。

「反抗や戦闘は猛烈なほど嘆美せられるが、しかしそれは同時に執拗であってはならない。きれいにあきらめるという事は、猛烈な反抗・戦闘をいっそう嘆美すべきものたらし

めるのである。俄然として忍従に転ずる事、言い換えれば思い切りの良い事、淡泊に忘れるという事は、日本人が美德としたところであり（中略）。そのもっとも顕著な現れかたは、淡泊に生命を捨てるということであろう。」

和辻の『風土』から日本人の性格を列記してみると・・・（太字は筆者）

- *受容性 ・大陸的な**落ち着きを持たず**、活発で敏感、疲れやすく、**持久性を持たない受容性** ・疲労は単なる休養よりも、新しい刺激・気分の転換などによって癒やされる
- *忍従性 ・熱帯的な非戦闘的なあきらめでもなく、寒帯的な気の永い辛抱強さでもない。**気短に辛抱する忍従性** ・自然を征服しようとせず**敵対しようとしなかった** ・持久的なあきらめをもつが、特殊な現象としてヤケ（自暴自棄）をおこす ・台風の猛烈さで**突発的に燃え上がる忍従性** ・燃え上がった感情の嵐の後に突如、静寂なあきらめをおこす
- *その他 ・**猛烈なほど嘆美される反抗や戦闘**、だが執拗であってはいけない ・**思い切りが良く、淡泊に忘れる** ・淡泊に生命を捨てる

米作りと改善主義

和辻の『風土』は、モンスーン型気候での日本人の気質を良く示している。しかし、それに加え、日本の地形とそこにおける米作りが日本人と日本らしさを形成したと考える。

日本の地形は多くが山地で平野が少なく、急流が多く、水害・がけ崩れ・火山噴火・地震・津波などの災害がおこる。自然への畏敬と豊作・安全の祈りが神への信仰と強く結びついた。人々は、海に囲まれて山や川など複雑な地形に分断されながら、それぞれの地域・集落がかなりの独自性と相互の依存を基本に暮らしていた。

畑作や牧畜に比べて水稲耕作は、農民個々では到底不可能であり、地域の人々の連携共同が欠かせない。1年に一度きりの米作りに農民はもとより領主・支配者も、栽培方法と出来具合に最大の関心を持たざるを得なかった。長年にわたる米作りでさまざまな工夫と《改善》を積み上げ、勤勉・几帳面で集団で共同歩調を旨とする精神的基盤も形成し、社会構造もまた米作りを基盤として成り立ってきた。たとえば1000年ほど前（日本は鎌倉時代）農業に関わる人はどの国でも圧倒的割合であった。ただ現在の国単位で見ると、日本ほどの高い割合で水稲耕作を営んだところはないと考える。日本で9割が農業でその内8割が米作りとすれば、国民の7割が米作りに関わっていたことになる。米作りは日本と日本人の体質・気質・社会性などに深く強く影響を与えた。

各時代の米を中心とする農業の状況と農村の状況を高校日本史の教科書から拾い集めたのが次の「各時代の米作りなどの農業や農民の状況」である。どの時代でもより豊かな暮らしを求めて努力をしたのだが、鎌倉時代と江戸時代に顕著な技術的進展をみた。主なものを太字で示す。

各時代の米作りなどの農業や農民の状況

各時代の米作りなどの農業や農民の状況 (新日本史・山川出版社から引用)

時代	コメ作りなど農業の状況	農地や村落・農民の状況
縄文晩期	北部九州に水田・水路など高度な水稲耕作始まる(紀元前5世紀初め頃)	
弥生	水田・水路・排水路が整備され田植えも始まった 木製の鋤や鋤、石包丁が使われ、後期には鉄器で木製農具などが作られた 米の生産量はそれほど多くなかった	東日本から東北地方までに水稲耕作広まる (紀元後2、3世紀までに)
古墳	農業生産力の向上で有力農民層が生まれた	地方に群集墳(小型古墳)が増加
平城京	政府が耕地拡大や養蚕指導など生産拡大をはかる	律令体制下で庸調や雑徭・兵役などを負担
摂関政治	有力農民(田堵)が田地の耕作を請け負った 耕作権を持つ名主が隷属農民(下人)や作人に請け作させた	国司が田堵(負名)を支配しそれまでの税に代わる新税(官物・臨時雑役)を徴収
鎌倉	畿内などで水車・用排水路の整備が進み米と麦の二毛作が普及 鋤・鋤・耨・鎌などの鉄製農具が広く普及 牛馬の利用が進みより深く耕せるようになる 悪条件下での栽培に強い品種(大唐米)が西日本を中心に作付けされる 従来の大規模経営(領主が隷属民を使役)から新技術を生かし荘民個々が特定の土地を世代をこえて同じ土地を手間をかけて耕作する小規模経営になっていった	生産が増大しその富をめぐる荘園領主・地頭・荘民間に荘園をめぐる対立が生じた 荘園や公領の年貢として米以外に絹・絹布・塩・材木・油・漆・馬などその地の特産物をあてることも少なくない 後期には強い団結を示す村落(惣)が現れた
室町	二毛作がさらに広がって近畿地方では米・ソバ・麦の三毛作も行われた 京都近郊では野菜栽培が行われ下肥なども使用 芋・楮・漆・藍の栽培が盛んで茶も普及した	南北朝期に惣は近畿地方で自治組織となった 惣は惣掟に違反した者や犯罪者を処罰したり領主に対して年貢・公事を請け負うことや年貢の減免を求めたりした
江戸	大規模な治水・用水路造成、湖沼や河川の干拓で耕地面積が飛躍的に増加した 農具の改良がすすみ備中鋤・千歯扱・唐箕などが考案され灌漑用に竜骨車・踏車が工夫された 肥料は山野の草木を使う刈藪のほか干糞・油粕などの購入肥料(金肥)も使われた 米・雑穀のほか綿・煙草などの商品作物の栽培も始まり紅花・蘭草・藍玉など各地の特産品も生まれた 国民的需要に支えられ菜種・綿・養蚕・漆・茶・生糸の生産が普及	夫婦中心の家族で1町歩ほどを耕作する小規模経営が多い 米や商品作物の栽培技術を説く『農業全書』などの農書が刊行された
明治	人口の増加で米は有利な商品となったが現物納の小作に対し現金納の地主は有利で寄生地主が増加 輸出用の製茶業の発展で養蚕が農村の重要な産業となったが江戸時代以来の菜種・綿・藍などは安い輸入品に圧迫され衰退した	小作人などの下層農民の生活は苦しく子女を紡績工場や製茶工場に出稼ぎに出したりして
昭和(前期)	動力を使った精米機・脱穀機を共同で使用開始	昭和恐慌下で経費節約をはかる経済更正運動が実施された
昭和(戦後)	化学肥料・農業・農業機械の普及で米の生産量は拡大したが国民生活の欧風化で米の消費量は減少 兼業農家が増え農業の生産性拡大が遅れ安い外国農産物の輸入で食料自給率は減少	農地改革で寄生地主制は解体 食糧管理制度の下で政府の赤字が深刻化し販売が自由化された

花開く日本の《改善主義》

さまざまな気象や天変地異を受け入れ、忍従とあきらめで暮らしながらも、より豊かな暮らしを求めている日本人々。中世末の御伽草子『浦島太郎』『一寸法師』『ものぐさ太郎』『かさ地蔵』などの多くは、人々の願望である立身出世、長者への夢を短編の物語にし

ている。普段は“守”でありながら、時が来れば一気に新しい状況（外来の文物も含め）を受け入れる“破”や《改善》をしようとし、それらを簡単・素直に受け入れる。“破”や《改善》は決して革命ではなく、暴虐的破壊的なものや執拗なものは嫌われる。

コメ耕作に直接関わる割合が減少した現代でも、勤勉・几帳面で集団で共同歩調を旨とする精神的基盤とともに、0から1よりも、1から2でも良い、1から10ならもっと良いと考える精神が多く国民に継承されるだけでなく、日本の社会的重要な基盤になっている。もちろん日本らしさを構成する要素は多種多様で重層的ある。それらを下の図にまとめた。

《改善》主義を花開かせた日本の構造

モンスーンの影響で「受容的・忍従的」が醸成された植木鉢（精神）に生まれ、外来の米や漢字・仏教などを巧みに自己のものとしていく日本人。なかでも、2000年以上も続く米作りは日本らしさの骨格を形成した。米作りを中核にして鉢の中の様々なものを養分とし、《改善》主義の花が咲いている、イメージだ。



《改善主義》・・・前例やあるヒントを元にして1から2, 2から10を生み出す改良、刷新型を得意とする日本らしい手法。0から1を作り出したり、革命的変革は不得意。

米作り・多神教・外来文化・仏教・天皇・・・勤勉さ・まじめ・共働性・神への畏敬と尊崇などを育んだ米作り。違いを認め幅広い考え方を受け入れる多神教的基礎に立ち、多様なものを受け入れて漢字や仏教などの外来文化を自己のものとしてしまう能力。政治的社会的変革に際して暴走・革命を押さえる安全弁・ブレーキとなった天皇制。これらが日本らしい《改善》主義を育んだ。

複雑な地形・災害・・・山が多く、谷や川に分断されて平地が少ない地形。台風・雪・洪水・山崩れ・地震・噴火・津波などの災害がおこる一方、四季の変化や地域のごとの差異に富む自然環境。繊細で複雑、淡泊であきらめやすい精神性が生まれた。

モンスーン・・・インドから日本に及ぶ季節風。インドは熱帯の湿潤、日本は熱帯の湿潤に加えて台風と寒帯（冬）の湿潤（氷雪）で特異的モンスーンの激しい影響を受ける。中国南部は熱帯の湿潤ながら北からの冷風で時折癒やされる。

受容性・忍従性・・・強い日光と湿潤で植物が繁茂する自然の恩恵を享受し、脅威には忍従する。その受容性も熱帯と寒帯の二重性を持ち、インド型の非戦闘的なあきらめの受容性ではなく、落ち着きを持たず・持久性を持たない受容性。寒帯的な辛抱強さでもなく、忍従性は気短に辛抱し、自然を征服しようとせず敵対しようとせず、突発的に燃え上がる忍従性で、燃え上がった感情の嵐の後に突如、静寂なあきらめをおこす。思い切りが良く、淡泊に忘れる。

おわりに

2014年12月、トヨタが世界のトップを切って燃料電池車（FCV）を市販し、翌年にはホンダも市販に乗り出した。燃料電池車は無限の水素を燃料に無公害で、究極のエコ車・夢の車としてカナダ・アメリカのベンチャー企業や大手の自動車メーカーが開発に乗り出していた。研究開発開始の1988年「海外メーカーの姿がかすんで見えるほど差をつけられている」とトヨタの開発担当者は胸に刻んだ、という（読売新聞2014年11月）。

この遅れを乗り越え、世界に先駆けての市販開始に至るのは、開発へのチームワーク・協力性、個々人の粘り強さ、会社のリーダーシップ、それを基盤とする《改善》に次ぐ《改善》の成功である。まさに「1から10」の典型例。

気まぐれなモンスーン型気候に忍従しながらの、狭い土地での集約的な日本の米作りは、世界中のどの地域の農業よりも地域の人々の勤勉さと工夫と忍耐を不可欠とした。その中から地域の神・神社を共にする村落共同体も形成され、相互の協力と連帯意識は高まった。畑作りや牧畜は米作りほど協力性を必要としないし、労働集約度も高くない。米を作る場合でも、他の国では粗放的で集約度と米依存度は日本に比べ低い。日本の特異な自然環境と米作りが生んだ日本人の特性が《改善》型であるなら、これをしっかり認知・共有して、実践することが日本のより大きな発展につながると考える。

最近科学分野で日本人のノーベル賞受賞者が増えていることは、「0から1が不得意な日本人」が見直される可能性がある。牧場型自然環境で「従順な自然から合理的思考が生まれた」ヨーロッパ人とは違い、自然に翻弄されて合理的思考を持てなかったかつての日本人。しかし現代では、科学的・合理的思考は広く日本人に及び、それがこれまでの自然認識「自然を受容し征服しようとせず敵対しない受容性、気短に辛抱する忍従性など」と結びつくことで、世界最強のパワーの可能性を日本人は持つのではないか。

参考資料

- 『風土』 人間学的考察 和辻哲朗著（岩波書店）
『神道－日本が誇る「仕組み」』 武光誠著（朝日新聞出版）
『伊勢神宮入門』 茂木貞純著（幻冬舎）
『日本書紀』（岩波書店）
『日本の歴史』（講談社）
『新日本史』（山川出版社）
『高校現代社会』（実教出版）
『日本語の歴史』 山口仲美（岩波書店）
『家紋の事典』 高澤等著（東京堂出版）
『家紋と名字』 網本光悦著（西東社）
『家紋から日本の歴史をさぐる』 インデックス編集部（ごま書房）
『読売新聞』
『北日本新聞』

著者略歴

1966年富山大学卒業 元富山女子短大・富山国際大学附属高校教諭
全国高校文化連盟新聞専門部元事務局長／現在同専門部顧問・年間紙面審査賞審査員